

何らかの薬を毎日服用している者にとって、突然もう一種類薬が増えるとなると、かなり過敏に反応してしまう。自分が今飲んでいる薬との飲み合せで、問題はないのかと不安になる。

乗船前に、マラリア予防薬のことについて書いてあったのを読んではいしたが、希望者は船内で有料で手に入るくらいにうけとっていた。ところが、横浜出港1週間後、船内で“マラリア予防に関する説明会”が開かれ、ケニアがマラリアの流行地域であるということから、かなり強制的に服用を勧められた。そして、その説明会があった日とその翌日、診療室のドクターとの相談時間が、1時間ずつ合計2時間設定された。その時間になると、診療室前の通路は長蛇の列ができた。船内に風邪が蔓延していたときだったので、風邪薬との併用は大丈夫なのか、と心配で相談にきた人も加わり、乗船客の1割以上が診療室を訪ねていたと思う。

私は8種類の薬を持って列に並んだ。「心臓の薬を飲んでいます」と言ったとたんに、「では別の薬を」と、毎日服用のマラリア予防薬ピブライマイシン（普通の人は週1回7週間服用のラリアム）を渡された。既に32日分が袋に入って用意されていた。私の持参した薬など見てもくれなかった。診療室に入って薬をもらって出てくるまで、3分ほどだった。そしてモンバサ（ケニア）到着前日の薬を飲んだ初日、私はその薬の副作用の下痢・嘔吐・悪心に苦しんだ。ドクターを責めるつもりはない。100人もの相談者を2時間でさばくには、そうせざるをえなかったのだろう。でも、全員が飲むことになるかわかっていたら、乗船前に主治医に相談して自分に合った薬を用意できたのではないかと思う。

過敏性大腸炎で下痢と便秘を繰り返す体質の私は、ロペミンというかなり強力な抗生物質を持っていた。テンダー（艇）に乗り移って上陸したイースター島、滞在時間は約3時間、駆け足でモアイ像を見て、船着場近くで昼食の弁当を食べた。トパーズの厨房で朝作られて、運ばれて置いてあったものが、午後1時ごろ配られたのだ。あまり食欲はなかったが、半分くらいはビールを飲みながら食べた。食べ終わ

るとすぐに召集がかかり、テンダーに乗りトパーズに戻った。それから2時間後、激しい嘔吐、その数時間後から激しい下痢に翌朝まで苦しんだ。いつもの下痢とちょっと違う症状とは思ったが、食あたりとは思わなかった。船での生活には慣れてきたが、気づかぬうちに疲労が蓄積していて、こんな形でできたのかなくらいに思って、ロペミンを飲んだ。

食事に顔を見せないからと、心配してキャビンを訪ねてくれた友人に、飲み水を汲んできてもらって、やっとひと息つけた。そして1日寝込んだだけで起き上がることができた。数日後、私と同じ症状で診療室に通院した人がかなりいると聞いた。しかし、ドクターは弁当が原因とは認めなかったという。後日、私は食事などで隣り合わせに座った人達20人くらいとそのことを話題にした。症状に軽重はあるが、下痢や嘔吐のあった人が半分ちかくいた。そのうちの何人かは診療室に通院し、何人かは私と同じように自分の持ってきた薬を服用し、また一口食べて「これは変だ」とすぐ止めた人、もちろんいつも通り美味しく食べたという人もいた。

実はその2ヶ月前にも、船内での洋上運動会でできた弁当で同じようなことがあったそうだ。その時も診療室側は、弁当と食あたりの因果関係を認めなかったという。食あたりの原因が船の厨房で作った弁当だと認めてしまってレストランが営業停止になったら、この旅は続けられなかったかもしれないが…。でも運動会のときに1度あったのなら、次に弁当をだすときには、長時間保存可能な食材を選び、なるべく食べる時間ぎりぎりに作り、直射日光の当たらないところに置いておく、くらいの配慮があってもいいのではなかったか。配られた弁当には、「2時間以内にお召し上がりください」と書かれた紙がはさまれていたが、食べる側の手に渡る前の、作って保管し配る側のほうに問題があると思うのだが…。

ピースボートに乗船するにあたって、私が一番心配だったのは船酔いだった。船のレセプションで自由にもらえるトラベルミンでは、私には効かないことはわかっていた。事前にあちこちに相談し、24時間持続性のある市販のアネロンと、病院からのポラ



モアイ像



下船後のピースボートは神戸へ

ラミンという薬を用意した。

横浜出港2時間前に服用し、神戸までの大揺れの中で、夕食もきちんと食べられた。持参した酔止め薬の効果を早々に確認できたのが、105日間の船旅を続けられる自信につながった。レセプションに用意してあるトラベルミン（持続性6時間）では、酔いが治まらない人もかなりいる。48回も船を出しているピースボートなら、もっと別な酔止め薬を考えてもよいのではと思う。後で知ったのだが、船内の売店では、センペアという持続性12時間の酔止め薬が売られていた。

ここまでピースボートを非難することばかりだったらと書いてきたが、最後は、ピースボートが弱者に優しく話で締めようと思う。食あたりで苦しんだあのイースター島だが、この島は空から入るのが普通で、3万トンクラスの船が着岸できる港はない。船は沖に停泊し、私たちは救命胴衣を着けて、8人乗りのテンドーボートに乗り移り上陸することになる。上陸説明会で配られたテンドーボート整理券

の順番で上陸し、またその順番で船に戻る。島での滞在時間が、全員同じになるようにするという。乗船客の大半が“ゆったりイースター島”というOPに申し込んでいた。高波や風向きでなかなか上陸地点も決まらず、何時間も待たされ、私の整理券は2日目の上陸になり、滞在時間も3時間ちょっとだった。A夫妻や高齢のDさんたちは、上陸できたのだろうかとか気になっていた。後日、Aさんに会ったときにきいてみると、彼らはピースボートの計らいで、1日目の最初に上陸できたという。だから、島滞在時間も5～6時間はあり、モアイ像だけでなく、ハンガロア村、オロンゴ岬、カノカウ火山のカルデラ湖も見ることができたという。そして何よりも良かったことは、1日目に上陸した人は、“食中毒”にならなかったということだ。

ピースボートもときにはそんな優しいことをしてくれるのかとうれしくなった。こんなちょっとした弱者への配慮が、もっともっと増えていけば、ピースボートの旅も楽しくなり、リピーターも更に増えるのではないかと思った。

1年もの長きにわたり、私の拙い文をお読みいただきありがとうございます。